

2024. 9. 8. 主日礼拝説教
聖書：マタイによる福音書13章18～23節
『継承してゆく者への呼びかけ』

「『種を蒔く人』のたとえの説明」と題されます。このようにして13章前半は種まきとそれに付随する理由や説明がくどい程に繰り返されるという構造に仕上げられています。

本日はその中から説明部分が記されます。この箇所は初代教会の初期(つまりマルコ以前)の解釈に由来しています。その解釈にはいくつかの特徴が見いだされます。

第一は、待てど暮らせど一向にやって来ない終末の時です。10-17節の初期の段階ではこの終末への緊張感が漲っていたのですが、本日の箇所、つまりマタイの時代にはそれらがすでに後退してしまい、代わって教会の宣教を聞く者たちに対する勧告が主になっているという点です。ですから本来の種まきのたとえからずれてしまっているのです。18-23節では終末への期待は薄れ、誘惑や迫害などと闘いつつ信仰を持ち続けることを励ます倫理的的文章に変更されているのです。

第二は、それゆえたとえが寓話化されているという点です。たとえとは一つの思想内容を表現するものです。しかし寓話の一つ一つに対応物があってそれらに対応しているだけなのです。つまり、イエスはたとえを語ったのに、教会はそれを寓話と解釈したのです。ここにもずれが生じています。

第三は、「言葉」(ホ・ロゴス)の多用です。この単語は初代教会の現実的な宣教や福音の質を意味しています。ここでも終末という理解からより現実的な課題への推移が見て取れます。

第四は、トマスによる福音書には種まきのたとえのみが記され、説明部分はありません。おそらくトマス福音書の成立過程では寓話という解釈が起こらなかったか、もし起こったとしてもイエスの言葉とまではされなかったということです。

18節の冒頭にはマタイがオリジナルの導入句として「あなたがたこそは」(新共同訳では省略)という言葉が挙げられます。つまり、「あなたがたこそは一聞きなさい」という構図が示されるのです。ここでマタイは、イエスの教えを終末に偏ることから、現実的に正しく解釈し継承してゆく者への呼びかけにシフトしてゆくことを宣言するのです。

その理由は19節以下の「道端・石だらけ・茨の中」の人々です。迫害が激しさを増す中で、一度は教会に加わった人々が信仰から脱落するのを憂い、その原因—思慮の無さ・一時的な情熱・迫害・財産への固執—を指摘するのです。やみくもな終末への期待ではなく、イエスの言葉を「聞く」とはどういう状況であるのかとの自己確認を問うのです。

わたしたちは未完成という言葉は知っています。しかし、未完全というのは聞いたことがありません。同じように不完全はありますが、未完成はありません。辞書を開くと、完成とは目標に達することであり、完全とは条件を満たすことだと記されています。マタイが問うのは、人生に求められるのは完成ではなく完全だということでしょう。例えば、生きて行くのには曖昧に流しておく方がうまく納まる場合の多いことが、そのことを示しています。完成・厳密・徹底を求めてしまうことが、どれほど人生を混乱させていることでしょうか。マタイが記す「良い土地」とは不十分・不徹底・不正確であったとしても、総

じてその曖昧さに耐えて希望を失わずに生きることなのでしょう。人生はそれで完全なのです。